■母校にかえろう
～富津小学校閉校後の利活用を核とした地域づくり施策の提案～

■チーム名：RED Lab.（代表者：岩切謙介）
メンバー：畔津伸彦，原嶋香菜子，藤田将史，芥慎太郎

■概要

今年度で閉校してしまう富津小学校は天草市にある﨑津・今富地区をつなぐ役割を果たしており，教育や交流など様々な面で地域アイデンティティの基盤となってきた．そのため閉校が地域に与える影響は大きい．そこで住民へのヒヤリングやまち歩きを通して得られた意見を元に，周辺環境，地域の現状等を考慮しながら，閉校までの小学校及び地域社会の取り組み，閉校後の小学校の利活用を核とした持続可能な地域づくりの提案を行う．

テーマは「母校にかえろう」．この「かえる」には，帰る・変える・還る，の３つの意味があり，これを提案の軸とする．そして，この軸に沿ったソフト・ハード・担い手に関する提案を行う．それぞれが有機的な関係を持ち，循環する仕組みを生みだすことが，地域づくりを持続させていく上で重要であると考える．

■目次

１．富津地区の課題
1.1　富津小学校の概要・現状
1.2　富津小学校と地域の関わり
1.3　地域の課題
２．富津地区の現状と取り組み
2.1　河浦町富津の概要
2.2　行政の取り組み
３．提案内容
3.1　提案の目的
3.2　全国での廃校活用
3.3　提案の軸
3.4　提案内容
４．考察

図１　富津位置図

１．富津地区の課題

1.1　富津小学校の概要・現状

富津小学校は，羊角湾を望む静かな入り江の奥に位置し，古くは隠れキリシタンの里で栄えた象徴である﨑津天主堂を校舎の窓から見ることができる．（**図２**参照）
小学校は埋め立てられた土地の上にある．小学校の周辺は干拓の歴史があり，時代によってその景観も変化してきた．そのため校舎・グラウンドの周りが干潟になっていて，羊角湾からの海水が流れ込み，一日のうちで水位の干満が見られる．周辺環境としては北側に水田が広がり，南側は羊角湾が広がるといった農村・漁村どちらにも触れることのできる環境にある．また，閉校した富津中学校，﨑津保育園が隣接している．（**図３**参照）

富津小学校は，1875年(明治８年)8月 - 崎津村字宇土の迫 881 番地に設立された．
現在までに，戦争による一時閉校や，改称を経て，現在の富津小学校がある．炭鉱が発展していたころは 40 人学級が 7 クラスあり，かつては分校も存在したが，徐々に児童数も減少し，現在は，複式学級 3 クラス，全校児童 30 名の小規模な小学校である．そして，平成 24 年 3 月での閉校が決まっている．

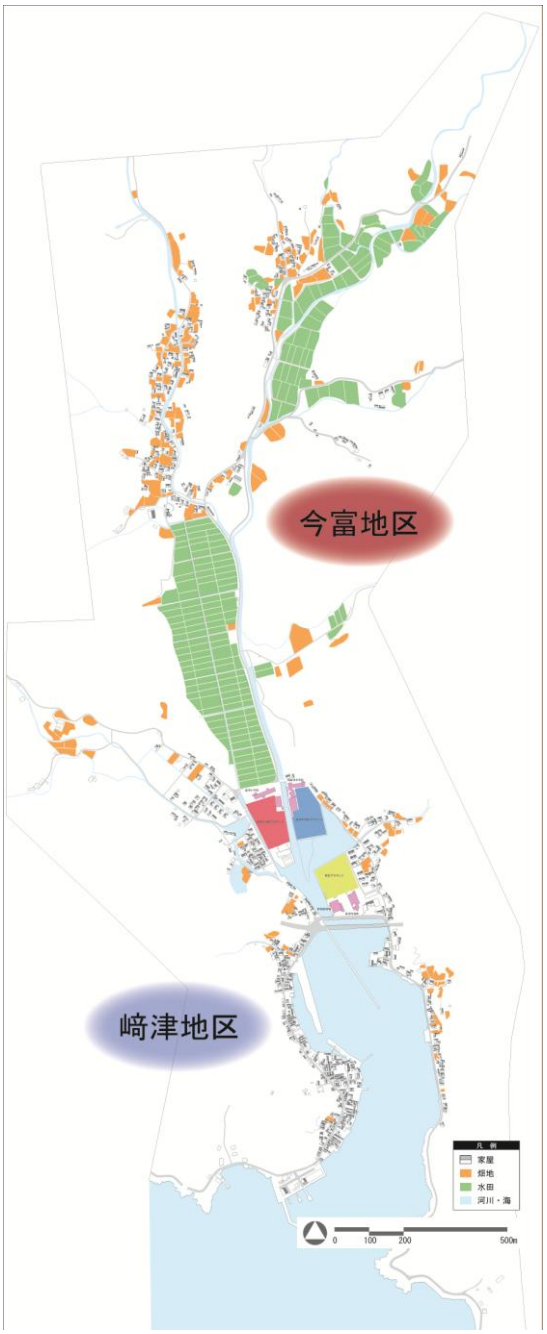

図２　富津地図

1.2　富津小学校と地域の関わり

富津小学校は教育方針として，学校公開・地域へ働きかけを積極的に行っている．例として，ふれあいの集いや和太鼓演奏を始めとした地域行事への積極的参加，海辺の活動（鯛などの放流）や田植え稲刈り体験への地域人材の活用が挙げられる．その他にも学校評価の実施や，隣接する﨑津保育園との連携教育なども行っている．
また，5 月に今富地区で，8 月に﨑津地区で，天草市教育委員会と熊本大学当研究室が実施

したまち歩きでは，富津小学校の児童だけでなく，保護者やお年寄りを始めとした多くの地域住民の参加があった（**1.3 地域の課題**参照）．その中で，子供たちの意見と，地域の人たちが普段思っていることやこれからの地域に対して感じている不安などを共有する機会を得ることができた．そこで得られた富津の良さとして人情があり，お年寄りと仲が良く，地域の結束が強いということが感じ取れた．

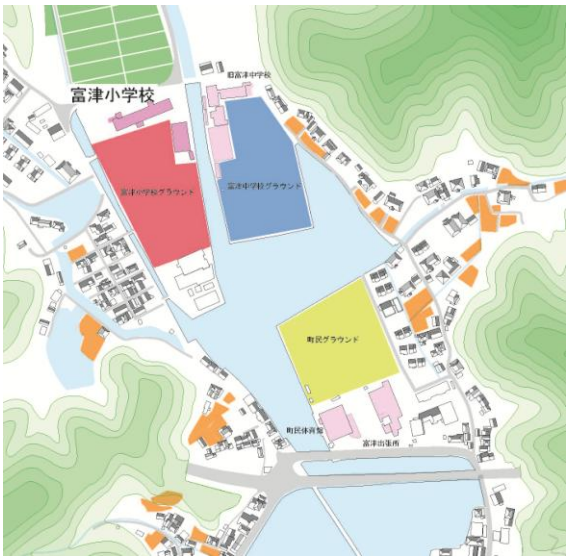

図３　富津小学校周辺地図

そして富津小学校は，﨑津地区と今富地区の中間に位置している．地域の中心にあって，地域から見守られる位置にあることに加え，そこから小学生の声が聞こえてくることで，地域の明るさも担っている．また，学校行事で今富地区・﨑津地区の人々が交流する機会を生むことからも，富津小学校は両地区をつなぐ存在となっている．

以上のことから，富津小学校は地域にとって重要な役割を果たしていることが分かり，閉校によるデメリットも多いと考えられる．

1.3　地域の課題

これまでに，天草市教育委員会と共に富津でワークショップ（以下 WS）を行っている．

■○と×－まち歩きの取り組み

平成 23 年 5 月 15 日に「今富のまちの○と×」，8 月 6 日には「﨑津のまちの○と×」という取り組みを行った．これは富津小学校の児童・保護者を対象として，景観という視点からまちを歩き，自分たちのまちの○：良いところ，×：改善すべきところを子供の目線で考えること，また子供達と一緒に大人もまちを歩くことで，子供の意見を聞きながら，改めて自分たちの地域を見直す地域理解・教育活動の一環として位置づけられている．

「今富のまちの○と×」には，熊本大学当研究室からスタッフとして 14 名が天草市教育委員会とともに運営を行った．富津小学校児童 17 名，卒業生 1 名，保護者 7 名，その他に富津小学校の教職員や地域住民の多くの参加があった．

○と×の取り組みでは，参加者を班に分けてまち歩き，まとめの WS を行う．今富では，前半は田んぼのあぜ道や川沿いの道を皆で歩いた．後半は，切支丹の学習班・生き物の調査班・クレソン料理班・わらじ・縄綯い体験班・フリー自由行動班と班ごとに今富の特徴を活かしたテーマを作り，学年や性別を考慮し班分けを行った．その後それぞれの班ごとで学生を中心としてまち歩きでの発見などをまとめる壁新聞づくりを行い，子供達に発表してもらった．

「﨑津のまちの○と×」では，熊本大学当研究室からスタッフとして 15 名が天草市教育委員会とともに運営を行った．富津小学校児童 17 名，卒業生 1 名，保護者 3 名，その他に富津小学校の教職員や地域住民の多くの参加があった．

﨑津では班ごとのテーマは設けずに学年や性別を考慮し 4 班に分かれた．前半は皆で﨑津のまちを歩きながら，地域住民の方から話を聞いて歴史を学ぶといった内容になった．中盤では漁協から船に乗り，海からの新しい視点でまちを眺めるといったメニューを加えた．まとめの WS では，まち歩きでの発見をまとめるだけでなく，それを元にして﨑津のまちの過去・現在・10 年後の未来という形式でまとめ，発表してもらった．

この「今富のまちの○と×」「﨑津のまちの○と×」を通して，今富・﨑津地区の豊かな自然や歴史がまちの良さとして多く挙がった．そして，ごみが落ちており汚かったという素直な意見を子供たちから聞くことができ，ゴミがなければ今のままでいいという声もあった．また参加した大人の意見として，自然，歴史などのほかに地域の密着度の強さを感じることができる感想が抽出できた．また，×の意見のなかに『学校がなくなる』というものがあり，昔に比べ子どもの声がしなくなり，これから地域がどのように変わっていくのか不安を感じているようであった．

■富津小学校の閉校を考えるワークショップ

平成 23 年 10 月 5 日には富津小学校に通う生徒の保護者，先生，地域の方々を集めて，閉校になる小学校と地域づくりを考える WS を行った．そこには熊本大学当研究室から 5 名が参加し，児童の保護者を始めとして地域住民や教職員の方々8 名の参加があった．そこで得られた地域の課題として，「グラウンドしか広く使える場所がない」という現状から「子ども達の遊ぶ場所がない」，「お年寄りが集まれる場所がない」という意見があった．グラウンド自体についても，海沿いにある環境から，「潮で樹木が育ちにくい」「記念樹が育たない」という意見があった．また，現在ある中学校のグラウンドにも関連して，「しっかりと管理がされていない」「草が生えてしまう」といった意見があった．また，子供たち自身も「閉校は嫌だ」と感じているようであった．

■富津の課題

これらのことから，富津小学校の閉校は，地域に住む人々にとってもマイナスとしてとらえられていることが分かり，幅広い年齢層の地域の人々が集う場所としての小学校の校舎やグラウンドの利活用を検討していくこと，そのために環境を考慮し，維持管理についても考えなければならないことを実感した（**図３**参照）．

２．富津地区の現状と取り組み

2.1　河浦町富津の概要

対象となる富津小学校は，熊本県天草市河浦町富津に位置している．（**図１**参照）
富津は今富と﨑津の両地区からなり（**図２**），人口 1,058 人（今富：410 人，﨑津：648 人）のまちである．それぞれの特徴として以下が挙げられる．

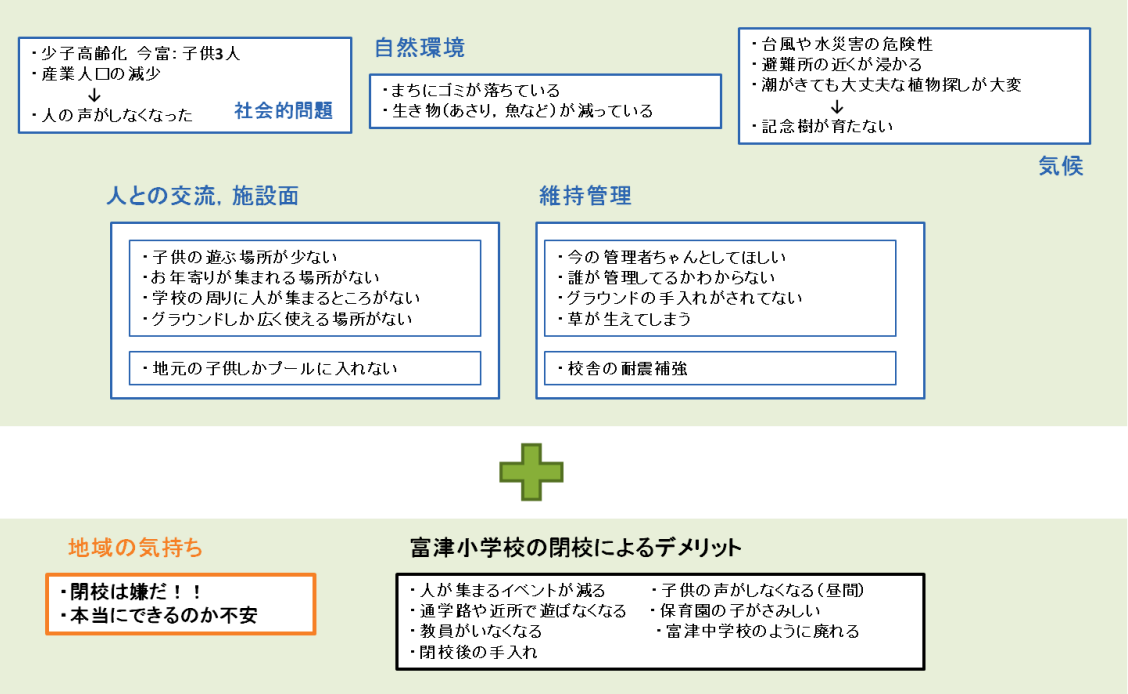

図４　富津地域の課題分析

・農村地域としての今富地区

﨑津の入江奥に位置し，今富川から東西に流れる二つの支流に沿って集落が形成されている．北・東・西に 6 つの集落が並び，山尾根が迫り平地の少ない典型的な中山間地域の純農村である．近世後半からの干拓により水田が広がったが，後背山に囲まれた厳しい地形で人々は農業を営んできた．水田では米，畑では麦と甘藷及び野菜が作付けされている．

・漁村地域としての﨑津地区

﨑津は海沿いに連なる 5 つの村落からなっている．西から東へと小高浜，下町，中町，船津，向江の順に並んでいるが，下町と中町とが純漁村的であり，向江は農村的，船津はやや漁村的である．船津は第二次，第三次産業への分化がすすんだ地区である．これに対して下町が 43.0%，中町の 60.9%が漁家である．

そしてこの地域も少子高齢化の影響を受けている．平成 17 年の国勢調査によると，天草市全体での人口は減少傾向にあり，県内の市の中で 3 番目に減少率が高くなっている．天草市旧市町別にみても全ての市町で減少しており，その中でも富津のある河浦町は 5 年間での増減率が－9.3%と高い減少率になっている．

人口減少の影響を受け，河浦町では学校の統廃合が進んでいる．現在河浦町の中学校は河浦中学校 1 校に統合されている．小学校についても，平成 24 年 4 月に一町田小学校・第一分校，富津小学校が統合し「河浦小学校」となり，平成 25 年 4 月に，河浦小学校と新合小学校，宮の河内小学校が統合することとなり，校舎は現一町田小学校の校舎となった．これから河浦地区は平成 25 年 4 月から河浦小学校，河浦中学校の一小一中体制となり新しいスタートを切る．

2.2　行政の取り組み

天草市では，市内全域で良好な景観を守るため景観条例を制定し，その中で特に特色のある地域を文化財保護法に基づき重要文化的景観として選定を目指している．文化的景観とは，「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法第 2 条第 1 項第 5 号）である．文化的景観のうち，文化財としての価値に照らし，特に重要なものを「重要文化的景観」として選定している．

﨑津地区は港湾都市としての歴史や狭隘な湾内のわずかな平坦地に家屋が密集した特異な景観を有することから平成 23 年 2 月 7 日に「天草市﨑津の漁村景観」として重要文化的景観に選定されている．今富地区では昔から農業が営まれ，収穫した農産物と﨑津に水揚げされた海産物との交換が行われていた．また，江戸時代からの隠れキリシタンに関する遺物や信仰の史跡，明治期に教会によって運営された孤児院跡などが残っており宗教的に重要な景観を有することから，﨑津地区と一体とした重要文化的景観選定への動きがある．このような背景から，﨑津地区では地域の将来にわたる全体構想として，景観の保存・修景，環境整備，観光振興等を計画的に行っていくための方向性を示し，積極的なまちづくりへとつなげることを目的とした「グランドデザイン」の策定が行われている．今富をはじめとした周辺地区との連携を視野に入れ，その中で今後の交流拠点としての活用が望まれるエリアとして，富津地区の中心に位置する富津小学校の跡地利用が検討されている．平成 14 年に河浦中学校への統合で閉校となった富津中学校が富津小学校の東に隣接している．富津小・中学校の川を隔てた向かい側には町民グラウンドもあり，3 面のグラウンドが集まる格好になっている．しかし，閉校後には 3 面のうち 2 面のグラウンドが使用されなくなってしまうため，このような特徴的な配置をしたグラウンドや学校校舎の跡地利用計画が進んでいる．

３．提案について

3.1　提案の目的

これまでに述べた富津の地域の現状から，今回の提案では，「母校にかえろう」をテーマとし，閉校してしまう富津小学校において，その利活用を中心としながら地域づくり施策の提案を行う．

閉校後の富津小学校の在り方を検討することで，富津小学校がなくなることで生まれる地域の課題にアプローチするとともに，もともとこの地域が持っていた課題についても改善でき，地域全体のまちづくりにとっても役に立つような提案を行うことを目的とする．そして閉校によって生まれるメリット（児童・保護者にとっての新たな交流の場など）についても検討を行い，提案に活かすことを考える．

また，閉校後を考えるだけでなく，閉校に向けた富津小学校の取り組みについても提案を行う．この目的として，閉校というマイナス要素を，母校，自分たちの住む地域について

改めて見つめ直すきっかけとすること．閉校後の取り組みの担い手づくりを行うこと．そのことで閉校して時間を空けることなくすぐ取り掛かれる体制を整えること．が挙げられる．ここで，担い手づくりに力を入れることは，今後持続可能な地域づくりを行う上でも重要であり，また文化的景観においても必要不可欠な保全の担い手になり得ると考えられる．

そこで，富津小学校を閉校後も利活用することによって，小学校が新たな地域づくりの拠点となり，様々な取り組みが行われ，地域づくりが持続していく仕組みを提案する．これにより，小学校閉校をネガティブに捉えるのではなく，地域づくりの活動がより活発になることを期待する．

3.2 全国での廃校活用

全国の廃校の発生状況の推移について見てみると，廃校発生数は平成 12 年度以降急増し，平成 16 年度の 576 校をピークにそれ行こうは減少に転じていたが，平成 21 年度に廃校となった公立学校の数は小中高校会わせて 526 校となっており再び増加の兆しが見られる．廃校となる背景には少子化による過疎や，一方で都市部での郊外集中化による原因がみられ，富津小学校の閉校についても例外ではない．

廃校となり学校としての機能が失われ，その後の利活用が議論されるものではあるが，廃校となった校舎の建物利用の計画がないものの割合は，近年では割合的に 20%台とはなってはいたが，平成 21 年度では廃校 526 校のうち 228 校，43.3%と大幅に増加した．

廃校後の既存の建物の主な活用用途としては，全体 1987 件のうち，スポーツセンター等の社会体育施設が 613 件と最も高い．次いで公民館・生涯学習センター等の社会教育施設に活用するものが 492 件と，社会的施設として利用されているものが全体の半数以上を占めている．

熊本県内で行われている廃校活用についてみてみると，文科省が選定する廃校リニューアル 50 選には『中央町福祉保健センター湯の香苑』が選定されている．もとは地区の少子化により閉校した中央東小学校であり，現在はデイサービスや介護支援の施設となっており，また子育て支援の活動も行われており幅広い世代のコミュニティ空間となっている．菊池市の旧菊池東中学校を活用した『きくちふるさと水源館』では現在は NPO が管理運営するグリーンツーリズムの拠点施設となっている．ここでは地域の子供たちに向けたそろばん教室や絵はがき教室から，「おいしい村づくり」に代表されるグリーンツーリズムのプログラムまで，様々な企画が行われ，都市住民と地域住民との交流の機会が生まれている．この施設の活用までには，地域住民から様々な意見が出され，議論が 5 年にも及んだという経緯がある．その上で現在の施設では既存校舎のものをそのまま受け継いだものが多く見られ，「現存のままなんとか活用したい」という地域の強い気持ちが守られている．

3.3 提案の軸

タイトルの「母校へかえろう」の「かえる」という意味には，単に母校に帰ってくるというだけではなく，その他の意味も込められている．本提案では，下に記す３つの「かえる」という概念を提案の軸とする（**図５**）．

帰る：地域に足を向ける仕組み

対象地がある河浦町は年々人口が減少しており，町を維持するためには人材の確保が必要である．そのためにも，出て行った人たちが地域に足を運ぶきっかけを作る必要がある．

変える：人や，施設の役割を変える仕組み

様々な取り組みを行う中で，地域づくりに関わる「人」の役割を考えていく．人とは，小学校の卒業生や地域住民，または行政やその他の組織の方々である．

また，現存する施設も，最小限の変化を加えることにより，地域づくりをさらに盛り上げるための，重要な拠点となる．

還る：地域に還元される仕組み

行われる取り組みは，最終的に地域に還元されることが重要であると考えられる．上記の「帰る」と「変える」の取り組みは，地域への還元を考えたものである必要があり，それが，地域づくりを持続してくために重要であると考える．

また，10 月 5 日に行われた WS で，住民の方々から挙げられた提案を，上記の軸にあてはめた（**図６**）．まず「帰る」には，お年寄りの憩いの場や人が集まれる場所で，運動会や神父道めぐりなどのイベントを行うという提案があてはまる．次に，「変える」には，デイサービス施設の設置などの校舎の整備や，ビオトープやガーデニング教室などのグラウンドの整備があてはまる．他にも，グラウンドの連携や，子供に管理をしてもらうなどの役割を変える提案も挙がった．そして「還る」には，本の寄贈や木の植樹の他にも，大晦日の校舎の大掃除や，卒業制作をギャラリーに展示するなど，学校に恩返しをする提案などがあてはまる．

3.4 提案内容

提案はソフトをメインに，ソフト・ハード・システムについて考えた．まずソフトがあり，それを実行するための最低限のハードがあり，その２つをシステムで支える，という関係性の下に提案を行った．

ソフト：フェーズ～半年後，5 年後，10 年後の未来～

閉校後の富津小学校の利活用を考える上で，これから行われる様々な取り組みをものがたり化し，未来を可視化しておくことは，取り組みを持続させていくための重要な視点であると考える．半年後に，想定した未来と比較して，出来ていること・いないことは何なのか，5 年後を考えると足りていないものは何なのか，などを考えながら取り組みを進めていく．またソフトを中心に考えることによって，提案の実現可能性も高くなる．

ハード：校庭の有効活用

小学校閉校後において，敷地面積が大きく，今富・崎津の中間に位置する小学校のグラウンドは有効な資源となる．そこでグラウンドの有効活用の幅を広げるためにハード整備を行う．提案のひとつとしては，住民の意見から出た，現在使われていない中学校のグラウンドなどと連携させ，閉校後も人が集まる空間をつくる．

システム：新しい組織づくり

現在，崎津地区には地域観光ボランティア「さいのつ」という NPO があり，観光ガイドなどを行っている．また，小学校には，PTA と閉校に伴って組織された準備委員会がある．このような，小学校・地域を支えている組織が力を合わせることで，閉校後も小学校校舎やグラウンドを使った取り組みを機能させていく必要がある．

4 考察

小学校の閉校をきっかけに，未来の地域を考える機会が生まれる．地域住民のほとんどが富津小学校の卒業生であることから，母校への恩返しの気持ちが取り組みへの意識へとつながると考えられる．また，取り組んだ結果だけが還元されるのではなくて，取り組んでいる活動自体も自分たちにとっての還元となり得ると考える．一つ一つの取り組みについても，自分たちの行動が成果に結びついていることを実感しやすいものを徐々に積み重ねていくことで，地域の人々の入りやすさ，取り組みに対する意識の向上を生み出していく．閉校になり，地域の活気も失われていく中で，還元によって新たなものが生み出され増え続けていくことは，地域の未来をつくっていく資源となり得る．

楽しい未来を実現させるために，人が集まる「場」をつくり，「人」を育て，地域に還元する．それは新たな地域づくりの「糧」となり，担い手は変化をしながら，取り組みは続いていく．

一つ一つの取り組みが仕組みによって繋がり，そのものがたりを地域で考え，少しずつ実現していくことが，地域づくりを持続させていく上で，重要となるのではないだろうか．

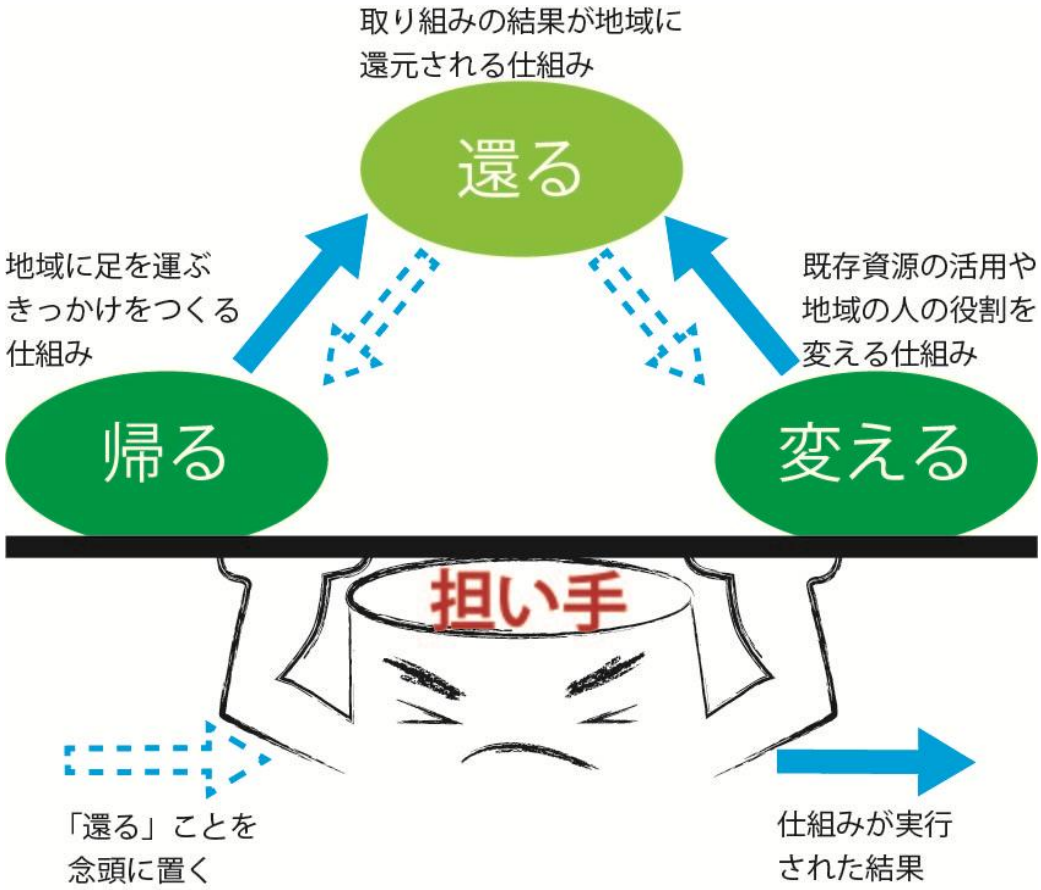

図５　提案の軸

帰る

移動
カヌー　人力車　自転車

イベント
運動会をやる
運動会のプロデュース
教会マラソン大会
神父道巡り

場所の希望
また行きたいと思える場所
年寄りの憩いの場
気軽にお年寄りが立ち寄れる場所
魚釣りの客のための施設

還る

物の寄贈
紹介したい本を毎年寄贈
ホームカミングデーに
毎年花を一本ずつ
小中学校で植樹
記念樹を並べる
記念樹の森

愛着のある場づくり
グラウンドに名前をつける

恩返し
大晦日に校舎の大掃除
卒業制作をギャラリーに

変える

校舎の設備
老人ホーム
デイサービス施設
レストラン
虫・魚体験館
カブトムシを飼う

グラウンドの整備
ビオトープ
ヤギ牧場
グラウンド農園
ガーデニング教室
桜公園

その他
釣り堀
遊歩道
３つのグラウンドの連携
船の係留所
神父道の整備

役割
教会との連携
子供たちで世話
小学校を町民グラウンドに

図６　WS で挙げられた提案のグループ分け